

第 5 回広島市立大学塾活動報告書

【活動概要】

加藤副館長の案内で広島平和記念資料館の見学と質疑応答

【日時と所要時間】

2019 年 11 月 6 日午後 4 時から午後 6 時 30 分（質疑応答約 30 分）

【活動詳細】

今回の活動では 2019 年 4 月 25 日（広島平和記念資料館 HP より）にリニューアルオープンされた広島平和記念資料館を加藤副館長の案内のもと見学、質疑応答を行った。広島平和記念資料館は再び日本のみならず世界中の人々に平和とは何か考えさせる場所としての役割を担うことになった。今回のリニューアルで展示方法が来訪者自身に考えさせる展示に変わった。今まで被爆された人々を再現された人形などが展示されていたが、それらは撤収されていた。代わりに被爆者の遺品や手記、写真や被爆された方々が書いた絵などが主に展示されていた。加藤副館長曰く、遺品や手記、絵などから来訪者自ら感じとり原爆や平和について考えてもらうための展示方法にしたそうである。

また私自身展示方法で印象に残ったのはマクロとミクロを対比させて展示していることである。資料館の中央付近で館内の雰囲気が変わるところがあり、そこが展示方法が変化される分岐点となる。

マクロは広島全体の被害のことである。館内の序盤の方では広島市の原爆投下後の状況などが展示されている。また広島市の HP によると「昭和 20 年（1945 年）12 月末までに約 14 万人が死亡したと推計されている」。おそらくなくなった方々は 14 万人よりも多いのではないかと思われるが正確な数字は把握できない。広島では数えきれないほど多くの方々がなくなったが、やはり数が大きければ大きいほど実感はわきづらく、イメージもし難い。一方ミクロはなくなった一人一人のことである。第 2 次世界大戦時にナチスドイツでユダヤ人大量移送に関わったアイヒマンは次のように述べている。「一人の死は悲劇だが、集団の死は統計上の数字にすぎない。」小さな子が乗っていた自転車やズボンなどの遺品を目の当たりにすると、その当時の光景が再現され、感情移入してしまう。展示の仕方で人々に訴えかけたいことやメッセージが大きく変わることにとても驚いたと同時に学芸員の方や関係者の方々がどれほど悩み時間をかけて考えリニューアルオープンしたかと思うととても頭が上がらない。

私は今回で広島平和記念資料館に訪れたのは 3 回目である。初めて訪れた時は小学校 6 年生の修学旅行でその当時はまだ人形などもありただ怖いという印象しかなかった。しかし歳を重ねるにつれ、広島平和記念資料館に足を運ぶごとに新たな気づきや平和について考えさせられる。今回の活動では平和都市ヒロシマとしての取り組みの偉大さを感じ、また一人一人が平和について考えることの重要さを学んだ 1 日であった。

参考 URL

広島平和記念資料館 HP <http://hpmmuseum.jp>

広島市 HP <http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/1111638957650/index.html>

